

## IAGG マスタークラスの活用法

平山 貴一

(日老医誌 2025 ; 62 : 108-109)

3日間、短い時間でしたが濃い時間をありがとうございました。私自身、非老年内科医の救急医ですが、老年内科の講義だけでなく、ケースや質疑応答を通じて、各国の医療福祉システムを窺い知ることができました。今回参加した理由は、ブータンでのソーシャルワークの中で感じた、これからどのようにコミュニティ内、そして公助として福祉システムを醸成するかという課題のヒントを得るためでした。各国の参加者に話を聞くと、ソーシャルワーカーが国家資格になっている国が多く、今後その制度を参考にしたいと思いました。

ガイドラインやエビデンスから、各国の事情に合わせた現状の対応や、具体的な事例を各国の参加者から紹介してもらえようという質問をすることを私自身は心がけました。日本ではこうですが、という枕詞を付けると経験則でも語れる場となり、参加人数が少なく、老年内科医の数も少ない国の参加者からの発言はより貴重な場となります。特に、家族の介護がせん妄予防になるという報告を講義の中で紹介され、家族に依存し過ぎることは家族の負担になり、そのバランスを取るためにどうしたらいいかと私が聞いた際に、各国の参加者が自国の家族の介護事情を紹介する機会となり、とても参考になりました。また、ブータンでの高齢者介護のヤングケアラーの問題を紹介したところ、それは我々の国の10年前の昔の問題だと答えてくれましたが、現代の日本でも問題になっており、もしかしたらその国で顕在化していないことも課題なのではないかと感じました。これからも地域アセスメントと制度との狭間をブリッジし、政策立案へつなげるソーシャルワークを今後も継続し展開していくライフワークとして考えられました。

英語の不安はありましたが、昨年の横浜で行われたIAGGの国際会議で、投影スライドをGoogle翻訳で日



本語変換し、質問は日本語で作成し、それを英語翻訳して質問するという経験から、今回もそれを活かすことができました。途中、自分自身でも英語で何を言っているのかわからず、発言内容に不安を覚えることがありましたが、参加者の皆さんがとても優しく、こういうことが聞きたいんだよねと意図を汲み取って繋げてくれました。不安があっても大丈夫です。日頃お会いできないエキス

パートの先生方，生き活きたこれから各国を担う医師達との異文化交流を是非楽しんでください。今回他分野の私を受け入れてくださり，貴重な経験やご縁をいただ

き，事務局や参加者の皆さん，本当にありがとうございました。